

「ちゃんとした証明書を持たず、キャナル・ストリート以南をうろついている人間を警察が逮捕しているそうだよ」

ピートの言葉を聞いてわたしは思わず飛び上がった。朝食を済ませた後、グラウンドゼロへ出かけようとしている時のことだった。ちゃんとした証明書を持たず現場近くをうろついているというのは、わたしのことではないか。幸運なことに、これまで証明書の提示を求めた警官は、郊外から駆けつけた州警察官である。彼らはニューヨーク市警発行「ワーキング・プレス」パスにある一九八六という数字が何を意味するのか、わからなかったのだろう。あるいは、数字に気付かなかったのかもしれないが、このパスで通してくれた。今日はこのパスで出かけると捕まるだろうか。いや、閉鎖地域内の住人なのだから、パスポートと電気料金請求書を持っていけば、まあ大丈夫だろう。

チャーチ・ストリートを下っていくと、すぐにマスクが必要になった。グリニッチ・ストリートに出てさらに下ると、通りの両側にテレビ用バンが軒並み駐車している。取材陣が進める最前線はリード・ストリートだった。以前のチェンバーズ・ストリートから後退である。その先に見えるグラウンドゼロは白い煙に覆われ、あの日の午後に崩壊したトレード・センター七号館の残骸が、燃える小山のように盛り上がって道を塞いでいる。日本のテレビ局のリポーターだろうか、ブランドもののスーツを着込んだ青年がバンの屋根の上に立ってマイク・テストをしていた。ライトに照らされ、さかんに汗を拭いている。見回してみると、どのバンも外国報道機関のものでドイツ語やスペイン語が飛び交っている。

バンの上に立たないとグラウンドゼロはほとんどカメラに写らないのだろう。バンの上に立つてもあの小山が塞いでいるから、まるでビルの間に見える山火事くらいにしか見えないのではないか。バリケードを乗り越えてその小山の写真を撮ろうとすると、すかさず警官に止められた。事件から五日も経ったので、警察が報道陣をしっかりと規制している。現場は秩序を取り戻し、当時の緊迫感は見事なほど無くなっていた。

わたしたちはウエスト・ストリートに出てみた。ここには通りの両側に電話会社や警察のクルマが並び、ダンプカーも姿を消して、すっかり整備されていた。スタイバサント橋はわたしたちが上った二日目以降、危険だということで立ち入り禁止になったという。ここでもチェンバーズ・ストリートまで近づけず、リード・ストリートあたりからグラウンドゼロを遠目に眺めてみると、異様に見えたあの惨害の痕はずいぶん片付けられたのに驚いた。煙もほとんど上がっていない。ウエスト・ストリートに溢れ出た残骸の処理は大分終わっただけらしい。

しかし、本格的な撤去作業はまだまだ続いていた。あの小山の向こう側に当た

るトレード・センター跡地周辺には十階分くらいのタワーの外壁がそり立っているし、巨大な残骸が異臭を撒きちらしながら煙を吐いて燃えている。

グラウンドゼロはまだ報道陣の立ち入りを許可していない。しかし、昨日、ピートの弟デニス・ハミルがどこの報道陣より一足先に忍び込んで、今朝の新聞に記事を載せていた。デニスは四番目の弟で、同じ「ニューヨーク・デイリー・ニュース」紙ブルックリン版にコラムを書いている。同時多発テロらしい彼の記事がマンハッタンでも掲載されるようになった。

「デニスはどうやってあそこに入れたの？」

ピートに聞いてみると、

「知り合いのコップ（警官）がいたのさ。ブルックリン・コネクションだよ」

と言って、にやつと笑った。ブルックリンで育ったハミル家の兄弟は、警官や消防士にたくさんの知り合いがいる。みんなブルックリンで育った仲間だ。とくにデニスはそういう「良い友達」に恵まれ、思わぬ情報をつかんでくることが多い。

「タワーの残骸は黒いリングイネ（少し太めの pasta）のとてつもなく巨大な山を思わせた。焼けて変色した鋼鉄がおかしな形の結び目や弓のように好き勝手にひん曲がっている。捻じ曲がった鉄がまるで棘のように残骸を突き刺し、足元はケーブルの束が絡みついて一歩進むたびに転んでしまえそう。残骸の隙間の穴から赤い炎がちよろちよろ顔を出し、まるで石炭を焼くオーブンのように、粉末になったシートロック建材をその穴のなかで燃やしている。焼けた建材の粉は金曜日の雨で黒ずみ、泥のようにすべてを覆っているのだった」

デニスはグラウンドゼロの正体をこう記していた。彼はトレード・センター南側の通り、リバティ・ストリートからタワー五号館の方へ歩き、ブルドーザーが残骸の山を掘り起こす脇を通り抜けた。三階の高さの南タワー正面外壁がグロテスクなアートのように立ちはだかり、巨大な墓石のようにも見える。隣の警官がこう呟いた。

「まるでローマ帝国の崩壊みたいだろう」

別の警官は残骸のなから飛び散った遺体の一部を捜していた。

「昨日は足のない女性をみつけたよ」

こう口にした警官は、

「たまらない仕事さ」

と唸った。遺体と遺体の一部は安置所になったブルックス・ブラザーズのビルに運ばれている。

「ニューヨーク・デイリー・ニュース」紙は十二日付の新聞に、発見された手の写真を掲載し、論争を巻き起こした。写真にあるのは、手首から切断された片手で、人差し指が前方向を差すように伸び四本の指は軽く結ばれている。指は五本

とも完璧な形で残っている。遺体の一部というのは、足や手などのこうした部分のこと。遺体安置所に運ばれると、ひとつずつボディバッグに収められるという。

#### \*消防士の葬儀

わたしたちはウエスト・ブロードウェイへ戻り、家へ帰ろうとした。スーツケースを担いだカップルがさつきから目につく。彼らは現場近くの住民で、今日になって帰宅を許された。といつても、ほんの十分間、当座必要なものを取りに帰るだけの許可が下りたのだった。なかには、自宅アパートに愛犬や愛猫を残してきた住民もいる。外出後にテロが起こり、タワーが爆発、崩壊したため、救い出せなかったのだ。これまで五日間も置き去りにされた犬や猫は無事だろうか。飼い主はさぞかし心配したことだろう。あの爆発と崩壊の恐ろしさを体験したペトトはどれほど助けを求め、飼い主の帰りを待ち望んでいたことだろうか。匂いも灰も埃もすべてペトトの健康に良くないのは明らかだし、水も食べ物もなかったら本当に辛い五日間を送ったことだろう。なかには家を飛び出してグラウンドゼロをさまよい歩いているペトトもいるという。ASPCA（米国動物愛護協会）が仮事務所を設置して、ペトトの保護に励んでいる。

わが家のガボは、昨年、思い切ってメキシコへ連れて行ってしまつて、本当に良かったと痛感した。もう十三歳の高齢、リュウマチも出てきたので、メキシコ・シテイ南のクエルナヴァカという古都に借りた小さな家で暮らしている。山間部の街は一年中、春のような天候に恵まれるので、彼も「引退生活」にすっかり満足。わたしたちがこの先いつ彼に会いに行かれるか、それだけは頭が痛い。

もし、われわれがチャーチ・ストリート一四九番地のロフトに住んでいたら、今日はスーツケースをもつて、荷物を取りに行くところだった。南向きの大きな窓が三つあったので、あそこから崩壊した両タワーの残骸や灰や塵が大量にアパートを襲ったことだろう。まだ電気も使えないアパートで、今頃は途方に暮れていたに違いない。

帰りがけ、ウエスト・ブロードウェイ角の小さな消防署前にたくさんの花とキヤンドルが供えられてあった。その上の壁に四人の幼い息子に囲まれた消防士の写真があった。ビンセント・ハロラン中尉、はしご車八号。行方不明になった消防士の数は昨日の発表で、三百三十七名。死亡が確認されたのが十八名。これまでのニューヨークの歴史で、一日に殉職した消防士の最多記録は十二名だった。一九六六年、二十三丁目のビル火災でひとつの階が抜け落ちた時のことである。

昨日、トレード・センターで亡くなった消防士の初めての葬式が三つそれぞれに行われた。ひとつは消防署勤務の神父マイケル・ジャッジ（六十八歳）の葬式。米国では軍隊に神父がいるように、消防署や警察にも神父がいる。あの朝、

ジャッジ神父はブルックリンから現場に駆けつけ、上階から飛び降りてきた女性に当たって死亡した消防士の傍らで祈りを捧げていた。上階から落ちてきた鉄片か何かの瓦礫が、ヘルメットを脱いで祈りを捧げる神父の頭にぶち当たった。西三十一丁目の聖フランシス教会で行われた葬式には二千名が参列し、そのなかにはクリントン前大統領の姿もあった。

消防委員会副局長のウイリアム・フィーアン（七十一歳）の葬式は、消防士として四十二年の経験をもつベテランらしいものだった。多くの若い消防士を育て上げ、みなに慕われていたフィーアンは、数年前に引退して悠々自適の生活ができたのに勤務を続け、還らぬ人となった。ニューヨーク市消防局長のピーター・ガンシイ（五十四歳）も三十三年の経験をもつベテランで、消防局の最高ランクを極めた。四千名が参列した葬儀では大きな体の消防士が揃って男泣きしていた。

これだけ大きな被害が出た理由のひとつは、現場に到着した消防団がトレード・センター地下一階に緊急対策本部を構えたからである。タワーが崩壊するとは誰も考えなかった。パストレインのプラットフォームがある地下七階まで、六十五フィートもの深さがある地下室全体はまだ瓦礫の下に埋まり、掘り起こされていない。多くの消防士がまだそこに残っているのです、生存者の救出に望みがかけられている。

チャーチ・ストリート一四九番地に住んでいた頃、わたしは火事を見つけたことがあった。エレベーターを降りて三階に足を踏み入れると、何か燃えている匂いがした。うちの部屋とは反対方向へ数歩踏み出してみると、向かいの部屋の扉から白い煙が噴出している。すぐ家に戻って九一一へ電話した。火事の通報など生まれてこの方したことがないので、心臓は高鳴り舌はもつれ、どう話したかよく覚えていない。しかし、エレベーターが使えないので、チェンバーズ・ストリート側の非常扉に来るよう、そこで待っていると話した。ほんの五分もしないうち消防車のサイレンの音が一斉に聞こえ、数人の消防士が非常階段を上ってきた。ひとりが斧で鋼鉄製の扉に穴を開け、ドアノブを回して扉を開けた。内部は煙でよく見えなかったが、改装工事に來た職人が業務用の研磨機をつけっぱなしにして帰ってしまったので、研磨機のなかで塵や埃が燃えているのだった。

「すばやくご連絡いただいて、感謝の言葉ありません」

火が消えるのにほんの十分もかからなかった。途中でうちの部屋も大丈夫か点検に來た消防士が、すべて終了すると帰る前に挨拶に来てくれた。背の高いがっしりした四十代はじめの黒人で、実にきちんとした態度だった。わたしは心洗われる思いだったのである。あの黒人消防士さんは北タワー爆発の後、いちばんに駆けつけたひとりだっただろうか。

アパートに帰りついでみると、上階から足音が聞こえた。エリザベス一家が帰ってきたのである。

\*エリザベスの話

「あの朝、(六階の)寝室でアイロンをかけていると、ジェット機の音が聞こえてきたのです。物凄い低空を飛んでいたのです、まるで六番街からチャーチ・ストリートの上空を飛んできたようだった。軍用機かしらと思つて窓に近づくと、大きな飛行機が飛んでいく後ろ姿が見えて、パッと貿易センタービルにぶつかつて爆発した。まるでブルース・ウィルスの映画みたいだつたと言えばよいから……あるいはコンピュータ・イメージのようで現実味がなかつたのです。大きな爆発ではなかつた。タワーに穴が開いて、煙が出てきたのを見ました」

エリザベスのアパートは最上階の五階、その上に六階に当たるペントハウスを増築した。夫婦の寝室と広いリビングの二部屋で、ここからトレード・センターは目の前にある。彼女はまず子供の学校へ電話を入れた。二人ともグリニッチ・ヴィレッジにある私立学校へ通つている。電話を受けた職員はタワーの爆発が起つたことを知らず、折り返し電話すると答えるだけだった。エリザベスは次に夫のキースへ電話。彼は十七丁目にある絨毯と家具の専門店の副社長である。この朝はアパートの銀行ローン組替えのために、エンパイア・ステート・ビルに向かつているところだった。

「とにかくテレビをつけて見てみたら……」

こういう返事だった。エリザベスがスイッチを入れると、画面は青空の下でタワーが爆発する瞬間を映し出していた。続いて次のタワーが爆発したところを中継した。

「他の飛行機です！」

キャスターがこう叫んだ。

エリザベスは大声を上げヒステリー状態になり、どうしよう、どうしよう、とさまざまなことを頭に浮かべた。

隣のロフトのトミーがトレード・センターの八十階あたりで働いているのではなかつたかしら。その朝、エリザベスがエレベーターで下りていくと、トミーが四階で乗り込んできた。夏休みも「レイバー・デイ」も終わり、子供たちは学校生活に慣れるのがたいへんな時期である。

「トミーのところの子供はふたりとも学校に慣れてきたか？」

彼女が訊くと、太っ腹のトミーは、

「すべてオーケー、心配ない、心配ない」

とにこやかに答えてきたのである。

トミーの妻のリンダへ電話しても、誰も出てこなかつた。またキースが電話してきて、今日はローンの組替えの日だから、すぐに来るようにと言っている。

「あなたは何もわかっていない！ 飛行機が二機よ。二機が両方のタワーにぶつかったのよ」

続いて銀行の担当者も電話で、すぐに来るように言っている。

エリザベスは泣きながら怒鳴り始めた。二分後にその担当者は電話を返して来て、

「わかりました。延期です。あなたの夫はエンパイア・ステート・ビルで待っていますよ」

こう聞いたエリザベスは再び発狂しそうだった。エンパイア・ステート・ビルにもジェット機が突っ込むかもしれない。すぐキースの携帯電話にかけたが、繋がらない。

「そこから出なくちゃいけない、いますぐに！ タワーが崩壊したのだから……」  
こんどは友達が電話してきて、こう怒鳴っていた。テレビを見るとタワーが崩れ落ちている。六階に上ってリビング・ルームの窓から外を見ると、北タワーが爆発し、崩れ落ちるところだった。銀色の粉末が輝きながら高いビルの上に降りかかり、美しかった。そう思ったのは一瞬のこと、エリザベスは白い粉末を見て、これはテロリストによる化学戦が始まったと思った。

しばらくしてキースから電話が入った。ニュースを聞いた彼はエンパイア・ステート・ビルの非常階段を飛び降りるようにして下り、通りに出ると子供の学校まで三十ブロックも走った。ふたりの子供の手を握ると、十七丁目の店へ戻ってきたというのである。

「窓を全部すぐ閉めてそこにいろ！」

夫が命令口調でこう言ってきた。消防車や警察のクルマのサイレンが鳴り響き、エリザベスは髪を引っ張って叫びたいほどのヒステリー状態に陥った。友達がアパートのブザーを押して入ってきて、

「みんな避難している。あなたも避難しなくてはいけないわ」

と誘いに来てくれたが、彼女がアパートを出たのはもつと後のことだったという。

「結局、午後一時か二時頃になってから、ブロードウェイを歩いてキースの店にたどり着いたんだわ。それから友達のアパートに行ってそこに泊めてもらったのです。次の日、キースはアパートへ帰ろうと言ったけれど、わたしはともその気になれなかった。わたしの兄がロンドンから電話してきて、すぐにそこから出ると言っていたのです。彼はエンジニアで、アスベストなど有害な物質が空気に混じっているから、絶対だめだと……そこで荷物だけを取りに来たら、閉鎖ライオンに入れてもらえなくて大苦勞。何とか忍び込み、必要なものだけつかむとロングアイランドの家に向かったのです」

エリザベス一家は郊外のロングアイランドに週末の家を借りている。そこで五

日間過ごして帰宅したところだった。第1章で書いたように、わたしはエリザベスがリンダと一緒に子供を連れて避難したとばかり思っていた。あの時、いつも身綺麗にしているエリザベスの顔がまるで人が違ったように思えたが、記憶違いのようだった。いや、認識違いと言った方が正確だろう。緊急時には思わぬ間違いをしてしまうことにはつとした。「北へ行く」と言っただけの子供の手を引き、リンダと避難して行ったのは、どこの誰だったのだろうか。

あの朝、テロリストの一番機になったアメリカン航空一一便がアパートの頭上近くを低空で飛行していたのには気付かなかった。二階のアパートの住人で、若い投資銀行家のトレイもその轟音で起きたという。わたしはよほどぐっすり寝こんでいたのだろうと思って、恥じ入る思いだった。